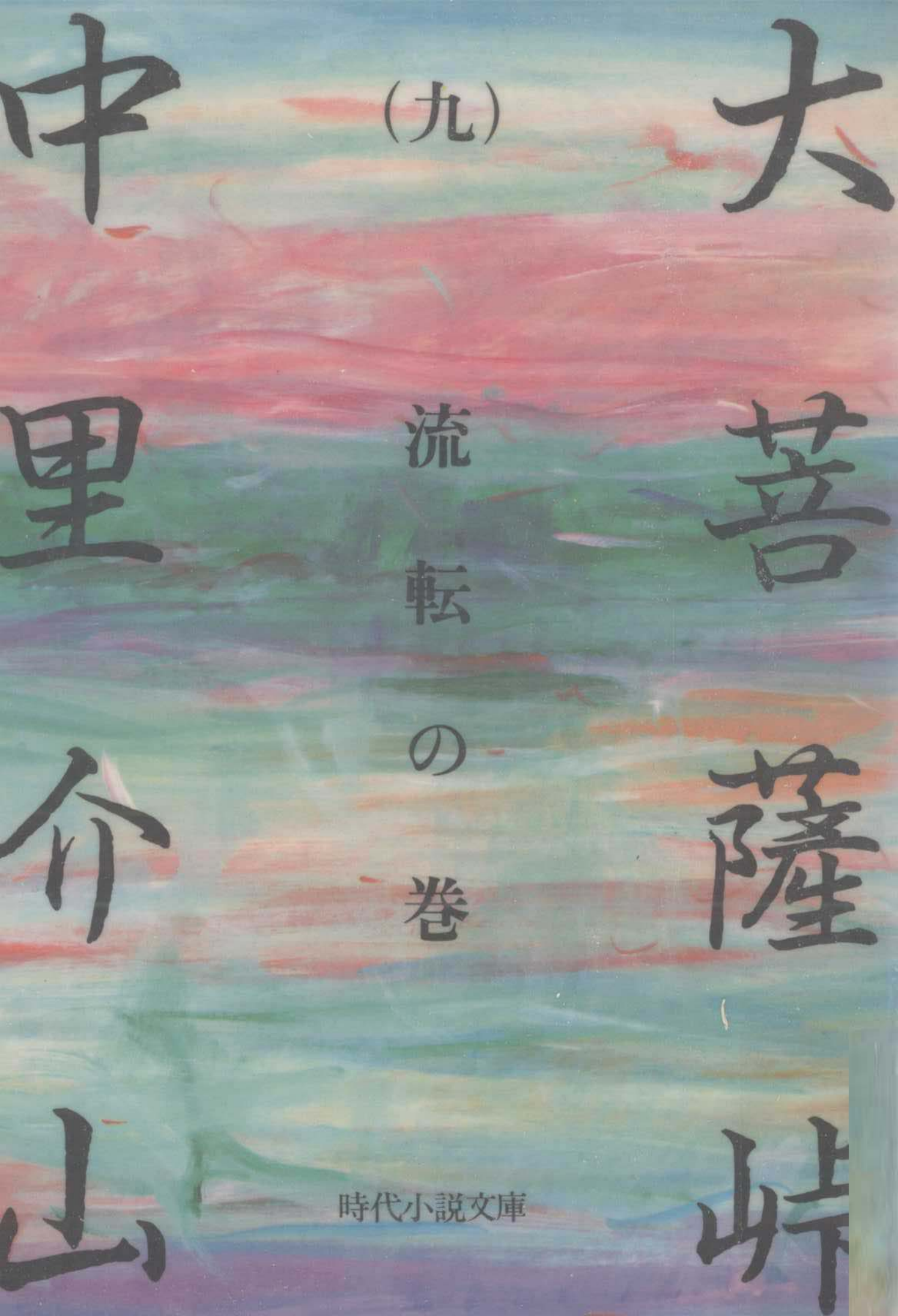




(九)

流
転
の
巻

時代小説文庫

時代小説文庫 9

大菩薩峠 (九) 流転の巻 全二十冊

昭和五十六年十二月二十日 初版発行

著 者 中里介山

発行者 原 秀行

発行所 株式会社富士見書房

東京都千代田区富士見一―十二―十四

電話東京二六一―五三七五(代表)

二一〇二 振替東京⑦八六〇四四

印刷所 新興印刷 製本所 本間製本

装幀者 熊谷博人

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-600109-7440(0)

時代小説文庫

9



富士見書房

大菩薩峠

(九)

流転の巻 中里介山

目次

流転の巻

七

みちりやの巻

二九三

『大菩薩峠』の醍醐味

島尾 敏雄 四六

大菩薩峠

(九)

流転の巻

流 転 の 巻

—

宇治山田の米友^{よとも}は碓氷峠^{うすいとうげ}の頂^{いただき}、熊野権現^{くまのぐんげん}の御前^{みまえ}の風車^{かざぐるま}にもたれて、遙^{はるか}に東国の方を眺めている。今、米友がもたれている風車。それを米友は風車とは気がつかないで、単にもたれ頃な石塔のたぐいだと心得ている。米友でなくても、誰もこの平たい石の塔に似たものが、風車だと気のつくものはあるまい。子供たちは、紙と豆とでこしらえた風車を喜ぶ。ネザラントの農家ではウィンドミルを実用に供し、同時にその国の風景に情趣を添えている。が、世界のどこへ行っても、石の風車というのは、人間の常識に反^{そむ}っているはずだ。しかし、碓氷峠にはそれがある。

碓氷峠のあの風車

誰を待つやらクルクルと

あの風車を知らない者には、この俗謡の情趣が判^{わか}らない。

誰が、いつの頃、この石に風車の名を与えたのか、また最初にこの石を、神前に据えつけたのは何の目的に出でたものか、それはその道の研究家に聞きたい。

一度廻らせば一劫の苦輪を救うという報輪塔が、よくこの風車に似ている。

明治維新のときに、神仏の混淆がいたく禁ぜられてしまった。輪廻という仏説を意味している輪塔が、何とも名をかえようがなくして、風車といい習わされてしまったのなら、右の俗謡は、おおよそ維新の以後に唄われたものと見なければならぬのに、事實は、それより以前に唄われていたものらしい。

しかし、昔も今もこの風車は、風の力では廻らないが、人間が廻せばクルクルと廻る。物思ふことの多い若き男女は、熊野の神前に祈って、そうしてこの車をクルクルと廻せば、待つ人の辻占になるという。

宇治山田の米友は、そんなことは一切知らない。米友は風習を知らない。伝説を知らないのみならず、歴史を知らない。

歴史のうちの最も劃時代的なことをも知らない。この男は死んだお君からいわせれば、素敵な学者ではあったけれども、まだ古事記を読んではいないし、日本書紀を繙いてもいないのであります。

ですから風車のことはしばらくおき、今、自分がこうして現に立っているところの地点が、日本の歴史と地理の上に、由々しい時代を劃した地点であるというようなことには、一向頓著がないのです。

大足彦忍別天皇の四十年、形はすなわち皇子にして、実はすなわち神人……と呼ばれ給うたヤマトオグナの皇子が、このところに立って、

「吾^{あがつま}孀^{はや}はや」

とやる瀬なき英雄的感傷を吐かれて以来、この地点より見ゆる限りの東を「あがつまの国」という。

その碓氷峠の歴史、地理の考証については、後人がいろいろのことをいうけれど、この「あがつまの国」に残る神人の恨みは永久に尽きない。蓋^{けだ}し、石の無心の風車が、無限にクルクルと廻るのも、帰らぬ人の魂を無限の底から汲み上げる汲井輪^{きふせいろん}の努力かも知れない。

上代の神人は申すもかしこし——わが親愛なる、わが微賤^{びせん}なる宇治山田の米友においてもまた、この「あがつまの国」にやる瀬なき思いが残るのです。

それ以来、米友には死というものが、どうしても判らない。死というものを現に、まざまざと実見はしているけれども、その實在が信ぜられない。

この度の道中においても、米友が——若い娘を見るときに、それと行き違うごとに、物に驚かされたように足を止めて、その娘の面^{かお}を篤^{とく}と見定め、後ろ姿をすかし、時としては、ほとんど走り寄ってすがりつくほどにして、そうして、諦^{あきら}めきれないで、言おう様なき悲痛の色を浮べて立つことがある。その時にはさすがの道庵も、ひやかしきれないで横を向いてしまうことさえある。さればこうして高きところ、人無きところに立って、感慨無量に「あがつまの国」を眺めるのも無理はありますまい。

さて、米友をひとりここへ残しておいて、連れの道庵先生はどこへ行っている。

道庵は峠の町で少し買物があるからといって、米友を先に、この熊野の権現の石段を上^{のぼ}らせて

おいたのですが——それにしても、あんまり来ようが遅い。

道庵の気紛れは、今にはじまったことではない。ある時は長くなり、ある時は短くなるのも、今にはじまったことではないが、気の短い一方の米友が、こうして別段にじれ出そうともしないのは、遙に東を望んで、泣いているからです。

「あッ」

しばらくあつて気がつきました。鴉からすが鳴いて西へ急ぐからです。

そこで、米友は玉垣へ立てかけておいた杖槍を取るが早い、転ぶが如くに権現前の石段を、一息に走せ下りました。

「今日は」

権現の前の石段を一息に走せ下ったところは、碓氷うすいの貞光さだみつの力餅ちからもちです。

「先生はどうしたい、先生は——」

その丸い眼をクルクルとして、力餅屋へ乱入しましたけれど、餅屋では相手にしません。

「先生……おいらの先生……」

次に米友は、その隣の茶店へ乱入しましたけれど、茶店でも取り合いませんでした。

「ちえッ」

米友は舌打ち鳴らして地団駄じだんだを踏みました。どうも見廻したところに、この近辺にわが尋ねる先生の気配がない。

茶店の隣が荒物屋——その隣が酒屋だ。この辺で、酤いびきの音がするだろう……てつきり——との

ぞいて見ても、道中の雲助どもが、ハ、ダ、かっているだけで先生の姿が見えない。

「ちえッ、世話の焼けた先生だなあ」

米友が再び地団駄を踏みしました。人家すべて二十を数える碓氷峠かみの上の宮の前の町、一点に立てば全宿を見通すことも、全宿の通行人を一々検分することも出来る。さりとて、わが先生の大蛇ちの躰ちが聞えない。

一旦、宿並しゆくならびの店という店を、一々探し廻った揚句あげく、また再び宮の前へ戻って、坂本方面を見通して見たが、そこにも先生の気配がありません。

「ちえッ、本当に世話の焼けた先生だなあ」

米友は宮の前の石段の下に立って、三たび地団駄を踏みしました。

本当に世話の焼けた先生である——生命にこそ別条はあるまいけれども、責任觀念の強い米友は、もしやと井戸の中まで覗のぞいて見た上に、峠の宿を裏返し、表返しに覗いて歩きました。

こうして血眼になって、東西南北を駆け廻めぐっている米友の姿を、広くもあらぬ峠の町の人々が、認めない訳にはいきません。

「お兄さん、エ、コリヤどうなさりました、迷子まいごに……エ、迷子はお前のお連れさんでござりまするか、年はお幾つぐらい」

訊ねてみると、どちらが迷子だかわかりません。迷子は年の頃五十を越したお医者さん。それを尋ね廻っている御当人は、子供だか、大人だか、ちよつとは見当がつかない。

峠の町の人はいしばらく呆あきれて見えました、それでも要領を得てみれば、この一種異様な迷子

さがしに、多少の同情を持たないわけにはいかないし、最初、藪から棒に、先生はどうしたと詰問されて相手にしなかった家々の者まで、本気になって、その求むる迷子についての知識を、寄せ集めてくれました。

その言うところによると、たしかに米友のいうとおりの人相骨柄にんそうこつがらの人が、力餅を二百文だけ買って竹の皮に包ませ、蠟燭ろうそくを二丁買って懐ふところへ入れ、さてその次の酒屋へ来ると、急に気が大きくなって、雲助を相手に気焰を吐いていたことまではわかったが、それから先が雲をつかむようです。

そこへ、ひょっこりと現われた一人の雲助が、

「ナンダ、その先生か、そんならうん州が駕籠かごに乗って、いい心持で軒をかいてござったあ、今時分は軽井沢の樹形ますがたの茶屋あたりで、女郎衆にいじめられてござるべえ」

この言葉に、米友が力を得ました。

二

そこで宇治山田の米友は、峠の町から、軽井沢を目がけて一散に馳はせ出しました。

これより先、道庵は、ちょっと買物をするつもりが、雲助を相手に、酒屋へ入るといい気持ちになり、うっかりその駕籠に乗せられて、うやむやのうちにかつぎ出されてしまいました。

峠の町から軽井沢までは僅わずか十八町、かつ、下り一方の帰り駕籠ですから、かつぐほうもいい心持、乗るほうは一層いい心持になって、大軒で寝込んでいるものですから、またたく間に軽井

沢の宿しゆくの入口、枳形ちぎの茶屋まで着いても、まだ目が醒さめません。

ここで、雲助はこの拾い物のお客をおろすと、宿の客引きと、飯盛り女が、群がり来たって袖を引っぱること、金魚の餌を争うが如し。道庵、眼をさまして、はじめて驚き、

「しまった！」

酔眼朦朧すいがんもうろうとして四方あたりを見廻したけれども、もう遅い。

「お泊りなさんし、丁字屋ちやうじやでございます」

「江戸屋でございます」

「手前は佐忠さちゆうで……」

「三度屋はこちらでございます」

「温かい御飯の冷えたのもございます、名物の二八蕎麦そばの延びたのもございます、休んでおいでなさいませ」

道庵、いかに、ジタバタしても、もう動きが取れません。

よし、こうなる以上は、この茶屋へも話しておき、どこぞしかるべき宿へ御腰を据えてから、人を走らせて米友を招くに如しかじ、と決心しました。その途端に、

「ねえ、旅のお先生、わたしどもへお泊りなさんし、玉屋でございます」

あだっばい飯盛り女が、早くも道庵の荷物に手をかけたものですから、道庵も鷹揚おうようにうなずいて、その案内で枳形ちぎの木戸から、軽井沢の宿しゆくへ入り込んだものです。

「ははあ」

道庵は物珍しげに軽井沢の町を見廻して、頭上にけぶる、信濃なる浅間ヶ嶽に立つ煙をながめ、「ははあ、いよいよ信濃路かな、一茶の句に曰く、信濃路や山が荷になる暑さかな……ところが今はもう暑くねえ」と嘯きました。

時は、無論、山が荷になるほどの暑い時候ではなかったけれど、さりとてまだ、ゆき、たけ、つ、も、りて裾の寒さよ、とふるえだすほどの時候でもありません。

幸いにして碓氷峠は紅葉の盛りでありました。坂本の宿から峠の上まで、道庵は名にし負う碓氷の紅葉に照らされて、酔眼をいよいよ真っ赤にして上つて来ましたが、上野と信濃の国境は夢で越え、信濃路に入つてはじめて、浅間の秋に触れました。

ここに、便宜上、武州熊谷以来の旅程を示すと――

熊谷から深谷まで二里二十七丁。深谷から本庄まで二里二十五丁。本庄から新町へ二里。この間に武州と上州との境があつて、新町から倉ヶ野へ一里半。倉ヶ野から高崎へ一里十九丁。

高崎は松平右京亮、八万二千石の城下。それより板鼻へ一里三十丁。板鼻から安中へ三十丁下り。ここは板倉伊予守、三万石の城下。安中から松井田へ二里十六丁。

松井田から坂本へ二里十五丁。こうして今や上州の坂本から二里三十四丁二十七間の丁場を越えて、信濃国軽井沢の宿に着いたというわけであります。

軽井沢へ来て、酔眼を見はつて見ると、その風物のいとど著しいのに、道庵は眼をきよろつかせないわけにはいきません。

空を見れば浅間ヶ嶽が燃ゆる思いの煙をなびかせ、地を見れば三宿の情調が、いとど旅感をそそるに堪えている。七十八軒の本宿に、二十四軒の旅籠屋。はたごや 紅白粉の飯盛り女に、見とれるようなあだつばいのがいる。なるほどこれでは、道中筋のお侍たちがブン流してお差控えを食うのも無理はないと、いい年をした道庵が、余計なところへ同情をしながら歩きました。

道庵先生は玉屋の店の縁先へ腰をかけて足を取り、洗足すすぎのお湯の中へ足を浸していると、旅籠屋の軒場軒場の行燈あんどんに火が入りました。それをながめると道庵は、足を洗うことを打ち忘れ、

「ははあ、初雁はつかりもとまるや恋の軽井沢、とはこれだ、この情味には蜀山しよくさんも参ったげな」
 事実、江戸を出て以来の情景に、道庵がすっかり感嘆しました。

ところが、そこへおあつらえ向きに遠く追分節が聞えだしたものだから、道庵がまた嬉うれしくなりました。

「すべて歌というやつは、本場で聞かなくちゃいけねえ」

両側に燈ひをともしはじめた古駅の情調と、行き交う人の絵のようなのと、綿々たる追分節が詩興をそそののに、道庵先生が夢心地になりました。

「あの、お連れさんをお迎えに出しましょうか」

女からこういわれて、ハッと気がついて、

「そのこと、そのこと、急いで人を出しておくんない、大将、まごまごしているだろう、間違つて坂本の方へでも落っこつてしまわねえけりやいいが……」

道庵がはじめて、米友のことを思い出しました。